

人間を成長させる力 — ボランティア

学長 鵜殿博喜

1. 明治学院大学におけるボランティア活動の広がり

明治学院大学のボランティアセンターは、阪神・淡路大震災のあと、震災の被災地でボランティア活動をおこなった学生たちの要望と、大学側のボランティアセンターを作ろうという気持ちが重なって、まず1998年に横浜校舎で発足し、3年後には白金校舎でもセンターが開設された。2000年代に入って文科省の第1回目の特色ある教育支援プログラムに選定され、ボランティアセンターは社会や他大学からも大きく注目されるようになった。またここ数年のあいだにボランティアセンターの活動はさらに広がりを見せ、1 Day for Othersのような、企業の社会貢献活動やNPOなどの活動への参加など、できるだけ多くの学生にボランティア活動の面白さを体験してもらう従来なかった企画が生まれている。

人も大学もなにかきっかけになって思わぬ方向に歩みを進めるかわからない。私自身、ボランティアが大学の特色になるとは考えてもみなかった。しかし、副学長時代、文科省のプログラムに応募するさいの責任者になったり、ソニーマーケティング社の「学生ボランティアファンド」（事務局は本学ボランティアセンター）の審査員になったりして、全国の大学のボランティア活動の内容を知るにいたって、ボランティアに対する認識は一変した。ボランティア活動とは奉仕の精神でおこなう活動であるが、その範囲は、支援、救護、援助などにとどまらず、町起こし、町づくりなどの地域活性化のための活動から国際的な問題解決のための活動、企業の社会貢献への参加まで、じつに多様多彩な活動を包摂する。考えてみれば、明治学院大学は、その前身の明治学院やさらに遡ってヘボン塾の時代から、社会貢献というのは暗黙の伝統になっていたのだ。多くの社会活動家を生み出し、福祉の世界で広く活動する人たちを輩出してきたのが明治学院という学校の特色であり、校風なのである。

大学での生活とは、講義を聴き、書を読んだり調査に参加したり、課外活動をしたり、キャンパス内で学生同士が交流することが重要であり中心であることは言うまでもないが、ボランティア活動は一種の社会活動であり、社会に深くかかわる活動という点で、日常的なキャンパス内での活動とは異なる。多くの場合ボランティア活動は社会のなかでおこなわれる。社会のなかでおこなわれるということは、必然的にさまざまな世代の人々とかかわるということである。学習支援ならば年少の子どもたちと、町起こしならば若者から高齢の住民たちと、活動が世界に広がれば異文化異言語の人たちと、いずれにしてもキャンパス内では経験できない経験をそれぞれの場ですることになる。

2. 3. 11後のボランティア活動

人間世界にはなにが起るかかわからない。日々の報道を見ていると、私たちが平穩に生活できていることは幸運以外のなにものでもないように感じられることがある。そのような平穩な生活感覚を破砕した

のが、東日本大震災である。地震や津波で一瞬のうちに家族も生活も一切合切奪われてしまった多くの
人々の無念を思うと、語る言葉が見つからない。また震災によって引き起こされた原発事故で今も故郷
を追われた人々の窮状は、天災と人災が重なって起こされたことである。

この大震災のあと、現地に駆けつけた学生たちのボランティア活動が始まり、2013年はその活動が3年
目に入り、本学の学生たちはボランティアセンターを中心に3つの地域に分かれて活動をおこなってき
た。継続した活動は現地の人々に勇気を与え、活動した学生たちも多くのことを学んだにちがいない。
大学と岩手県大槌町との協定は結ばれて2年になるが、その交流は年を追うごとに深化しているように
思われる。その一方で、学生たちのなかにある種の葛藤、悩み、迷いが生まれてきたようである。熱心
に深く活動した学生ほど葛藤や悩みは大きいと思われる。ゲーテが『ファウスト』のなかで言わせた、
人間は努力するかぎり迷うものである、という有名な言葉は、いつの時代にもあてはまる普遍性がある
のだろう。生きて努力するということは、葛藤や悩み、迷いをつねに抱え込み、それを克服しようとし
てまた努力する、ということを繰り返すことであり、悩みは尽きないのだ。しかし、だからこそ人間だ
とも言える。

ボランティア活動と学業との関係については大学が努力しなければならない分野である。社会的活動と
学業とのかかわりがきちんと整理でき、両者の相乗効果が認められるような教学制度をつくらなければ
ならないと思っている。

3. ボランティア活動と人格教育

人間の人格というものはどこで形成されるのであろうか。人間が社会的生き物である以上、人間の人格
は人間的社会的なかかわりのなかで形成されるはずである。たとえばボランティア活動は、社会のなか
で、さまざまな年代の人々とかかわるなかでおこなわれると考えると、この活動そのものが知らず知ら
ずのうちに人格形成を促していると言うことができるのではないか。ボランティア活動をおこなってい
る学生たちと接し、彼らと言葉を交わしていると、人間として成長しているという手応えを感じるし、
実際そうなのだろうと思う。

あとは、本学特有のキリスト教による人格教育とボランティアをどのように結びつけるかである。その
結節点が Do for Others なのであろう。自分がして欲しいと思うことを他者のためにおこなう、という
精神。さらにその前段から言えば、「求めなさい、そうすれば与えられる」という積極的な生き方。この
精神や生き方がボランティア活動と結びついたとき、キリスト教による人格教育の具体的なあり方のひ
とつが具現するのであろう。人間を成長させる力、それがまさにボランティア活動なのだ。ボランティ
アセンターが明治学院大学を代表する顔のひとつであることは、まぎれもない事実である。それは大学
としても誇りであり、他大学とは異なる理念のもとでおこなわれるという点では、まさに明治学院大学
のボランティア活動であり、ボランティアセンターのあり方なのである。

東日本大震災、「決して君を忘れない」

ボランティアセンター長 原田勝広

ボランティアセンターは何のために存在するのか？ 人助け、自己実現、人格教育……。いろんな考え方があると思う。3年前、その「解」は海の向こうから津波とともに、突然やってきた。東日本で多くの家が流され、街が壊滅的な被害を受けた。「この人たちをなんとかしなくちゃ」。ボランティアセンターの教職員、学生の間からそんな声が自然に起こった。そして悟った。そうか、ボランティアセンターは、こういう時、支援に駆けつけるために存在していたのだと。

「3・11」から1ヶ月もたたないうちに、明治学院大学の黄色い旗が、仙台に、石巻に、そして女川に立った。さらに、大槌、気仙沼、陸前高田へと広がった。あれから3年、被災地に支援に行った学生の数は900人を超えた。私たちの心はずっと被災地とともにあったし、これからも変わらないだろう。

あの時、駆け付けた避難所の壁に無数のビラが風に揺れていた。顔写真が張られ「この人を探しています」と呼びかけている。行方不明者を探しているのだ。手書きのペンの文字が目飛びこんできた。「××（少年の名前）！ どこにいる？ 待っている、パパが必ず助けに行くからな」。息をのんだ。食べ物を配っていた手が震えた。

夏の明治学院大学の教室で。新聞の切り抜きを宿題にしている私の授業があった。ある学生が、行方不明者の名前を列挙した記事を切り抜き、持ってきた。冗談かと思ったら、女子学生は静かに名前のひとつを指さし「私の母です。ようやく見つかりました」。女川の焼肉店のおかみさん。お肉をサービスしてあげるので子ども達に人気があったんですよ、と言った途端、彼女の目から涙がこぼれた。無数の名前の一つひとつに重い人生があったのだと、当たり前なのに気がつかされた。

あまりにも大きな喪失感と、私たちのできることの小ささ。その落差に打ちのめされる日々だった。最近新聞で、こんな句に出合った。

「蛤と為り 不明者と会う 雀」。人里ではどこにも雀のちょんちょん跳ねるかわいい姿がある。しかし、人がいなくなると雀もいなくなるという。不明者が死者となって眠る大海原では、スズメも貝に姿を変えているのだろうか。

もう一句。「父逝きし 海より海胆（うに）は あがれども」漁業がようやく復興した。ウニもさんまもカキも戻ってきた。ただひとり、親父は帰って来ない。

悲しいことは一杯ある。しかし、人はその悲しみを乗り越えて生きていかななくてはならない。支援とは、その悲しみを共有し、いっしょに前を向くことでしかないのかもしれない。考えてみれば、学生の頑張りもあってボランティアセンターの活動は、明るい元気なものが多い。大槌町のわんぱく広場や学習支援は、未来を担う子ども達を育てることだし、陸前高田へ小学生を連れて行くツアーは現地と都会をつなぐ貴重な企画だ。気仙沼大島のゆず畑の手伝いやマラソン、祭りの支援は被災者を元気にするの

は間違いない。こんな活動の継続を期待したい。

現地では緊急から復興フェーズに入り、支援に対するニーズが変化している。身近な生活再建でいえば、以下のような課題があるといわれる。医療機関、専門医院の復旧の遅れで医師不足が深刻。高齢化による仮設での孤独死、自殺、体調悪化が顕著。子どもは遊び場の不足や肥満児の増加。中長期の心のケアの必要性。母子家庭の孤立。新たに詐欺や悪徳商法の被害。単身高齢者の増加。民生委員の不足。どれも難しい問題である。NPOがいろいろな分野できめ細かい支援に入っているほか、詐欺などについては、法務省が人権ダイヤルなどで対応を始めている。学生の手には負えないものもあるが、先にあげたような学生らしい支援で貢献できるものもある。創意工夫しながら、課題解決に役立ちそうなアイデアがあれば、積極的にチャレンジしてほしいと思う。

そういう意味で、注目してほしいのは、社会起業家である。被災地には、行政だけでなく、企業、NPO・NGOの人たちが支援に入っている。しかし、それでも十分ではない。そこで、ビジネスの手法で社会的課題を解決しようとする人たちがいる。それが社会起業家だ。例えば、GRAグループ代表の岩佐大輝さん。宮城県亘理郡山元町出身だが、被災後、故郷に駆けつけ、ITによる先端施設園芸でイチゴ生産に取り組んでいる。日照時間や二酸化酸素の濃度管理のほか、天窓の自動開閉や温度・湿度をITで細かくコントロールする。お年寄りや女性でも簡単に甘いイチゴができるので注目され、10年で1万人の雇用を目指している。2012年にはインドに植物工場を建設し、この日本式イチゴ栽培で、インドの女性の雇用創出に貢献しようというわけである。世界で戦える、被災地発のグローバル企業だ。

社会起業家といえば、陸前高田で学生がお世話になっている、なつかしい未来創造株式会社の専務を務める河野通洋さん（八木澤商店社長）もそのひとり。あの震災で、江戸時代から続く老舗の土蔵、店舗、自宅を流されたが、社員38人を解雇することなく守った。13年にはついに本社を再建、自社醸造した醤油の出荷を開始した人である。いま、なつかしい未来創造で、学生インターンシップの受け入れやビジネスセミナーを開催。「ことしは市内にインキュベーション施設を完成させ、10年後には陸前高田に50社のベンチャー企業を集める」意気軒昂である。本当の支援というのは「マイナスからゼロへ戻す」のではなく「創造的なプラス」であるべきだとわかる。

2013年度、ボランティアセンターの活動は地域活動から1 Day for Others、海外ボランティア、日本赤十字社との連携、ソーシャルビジネスへと飛躍的に発展した。詳しくは、この報告書をご覧ください。思えば、東日本大震災が触媒の役割を果たしてくれたのかもしれない。どの活動もどこかで、被災地につながっているような気がするし、現地から持ち帰ったものも多い。震災支援は、ボランティアセンターの原点になっている。

支援を通して既に私たちは、被災地に多くの友人、知人ができた。これからも皆さんとともに生きていく。

もう一度、あのピラの少年へ、焼肉店のお母さんへ、そして、すべての人へ「決して君を忘れない！」。